

特集 東日本大震災の復興計画と中長期的支援

東日本大震災の復興計画と中長期的支援

金 吉晴, 北村 秀明

平成 23 年 3 月 11 日に発生した東日本大震災は未曾有の被害をもたらしたが、その一方で被災住民への精神健康支援はかつてない広がりを見せつつ展開された。本シンポジウムでは急性期から中期の支援を視野に含めつつ、実際に支援活動に従事されてきた演者たちがそれぞれの活動内容と展望を論じ、それに加えて厚生労働省からは国としての方針についての発表が行われた。

大塚、酒井らは岩手医科大学における被災地ケアについて報告した。彼らは、他大学、病院などの協力を得ながら、岩手県のこころのケアチームとして、避難所巡回、ハイリスク者の個別訪問、遺族支援、従事者ケアを行ってきた。その中で、地域主体のこころのケアのモデル初期（災害発生～避難所設置）、医療体制構築中期（仮設住宅設置）、災害支援との連携等長期（復興時期）といった中長期的モデル構築の必要性を具体的に提示した。

松岡は、東北大学病院精神科（精神科医、看護師、臨床心理士ら）の被災地への支援活動を通じて明らかになった被災者および支援者に関わる現状の精神科的問題点を紹介した。また、宮城県のこころのケアセンター設置に際しては、人的資源不足の解消、支援専門家の育成、医療従事者の啓発などを重点的に行うため、東北大学寄付講座の設置が必要とされたという。こうした被災地の大学精神科の視点からみた精神保健医療福祉の中長

期計画について、報告が行われた。

丹羽は、福島医大こころのケアチームの活動を通じ、福島県の被災・支援状況と今後の復興ビジョンについて述べた。住民の県外移住、放射能汚染、抑うつ、アルコール問題、自殺の増加などといった現状を紹介し、今後のこころのケアの課題として、精神疾患患者の治療の継続と維持、PTSD やアルコール依存への早期介入、高齢者の認知機能低下の防止、自殺の抑止、医療・福祉スタッフのメンタルケア力の向上の必要性を指摘した。

朝田は、被災地にある精神科講座としての地域支援の試みについて報告した。彼は、子供を重視した息の長い介入が必要であるとし、PTSD やうつ病の知識啓発に用いるアニメーションの作成を開始した。また、「被災地における心の支援：とくに児童生徒を対象に」とする筑波大学のプロジェクトを立ち上げ、同大学の学生たちによる学術ボランティア活動を継続しており、その活動内容や実施に至るまでの過程についても紹介した。

池淵は、地域生活支援とりハビリテーションの視点から、中・長期の被災地支援について述べた。特に彼女は、精神障害者支援を行う中で、「災害時の対処スキル」が重要であることを指摘した。そして、被災地のニーズや地域の資源の状況に応じ、適したモデル（精神科仮設診療所における多職種アウトリーチサービスモデル、もしくは包括

第 107 回日本精神神経学会学術総会＝会期：2011 年 10 月 26～27 日、会場：ホテルグランパシフィック LE DAIBA、ホテル日航東京

総会基本テーマ：山の向こうに山有り、山また山 精神科における一層の専門性の追求

シンポジウム：東日本大震災の復興計画と中長期的支援 座長：金 吉晴（国立精神・神経医療研究センター）、北村 秀明（新潟大学大学院医歯学総合研究科精神医学分野）

型地域生活支援センターモデル) を雛形とすることを提唱した。

中谷は、東日本大震災における厚生労働省精神保健分野の対応と今後の対策の方向性について概説した。被災地では、PTSD 症状の長期化や生活への不安などからうつ病や不安障害などへの中長期的対応が必要であるという。そのため、地域精神保健医療を担う人材の確保を重要と考え、①地域精神保健活動の継続的な実施、②地域精神医療機能回復・充実、③心のケアの支援拠点の整備に関する事業については、第三次補正予算案にお

いて要求を行ったことを報告した。

秋葉は、広島の被爆体験と東日本大震災を比較し、過去の体験から課題を究明する努力の必要性を示唆した。例えば、被爆後の学者・研究者の中には、自ら被爆しながら研究対象としての社会や被爆者との関わりを超えた形で、被爆者救援のために手を差し伸べた人々も多かったという。こうしたことから、秋葉は、研究者・専門家であり、一人の人間としての責任を果たそうと努力した人々の足跡から教訓を得られるのではないかと指摘した。